

坂 尻 遺 跡 (溝地地区)

—シノムラ化学工業株式会社工場建設に伴う緊急発掘調査報告—

1 9 9 4 . 3

静岡県袋井市教育委員会

坂 尻 遺 跡

(溝地地区)

— シノムラ化学工業株式会社工場建設に伴う緊急発掘調査報告 —

1994.3

静岡県袋井市教育委員会

例 言

1. 本書は、平成4（1992）年9月30日より12月18日に、静岡県袋井市国本字溝地886番地外3筆で実施した坂尻（さかじり）遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、坂尻遺跡内でシノムラ化学工業株式会社静岡工場の工場建設が計画されたため、袋井市教育委員会が建物建築範囲及び調整池で遺構の破壊される部分について発掘調査を実施した。
3. 発掘調査は、早川保子（袋井市教育委員会・臨時調査員）が調査を担当した。
4. 資料整理・報告書作成も早川が実施した。
5. 発掘調査に際して、シノムラ化学工業株式会社静岡工場の皆さんにはたいへんお世話になった。ここに記して感謝したい。
6. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課職員が行った。
7. 調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調 査 経 過	1
第3章 調 査 体 制	3
第4章 調 査 方 法	3
第5章 地理的環境・歴史的環境	4
第6章 遺 構 の 概 要	6
第7章 遺 物 の 概 要	14
第8章 まとめにかえて	17

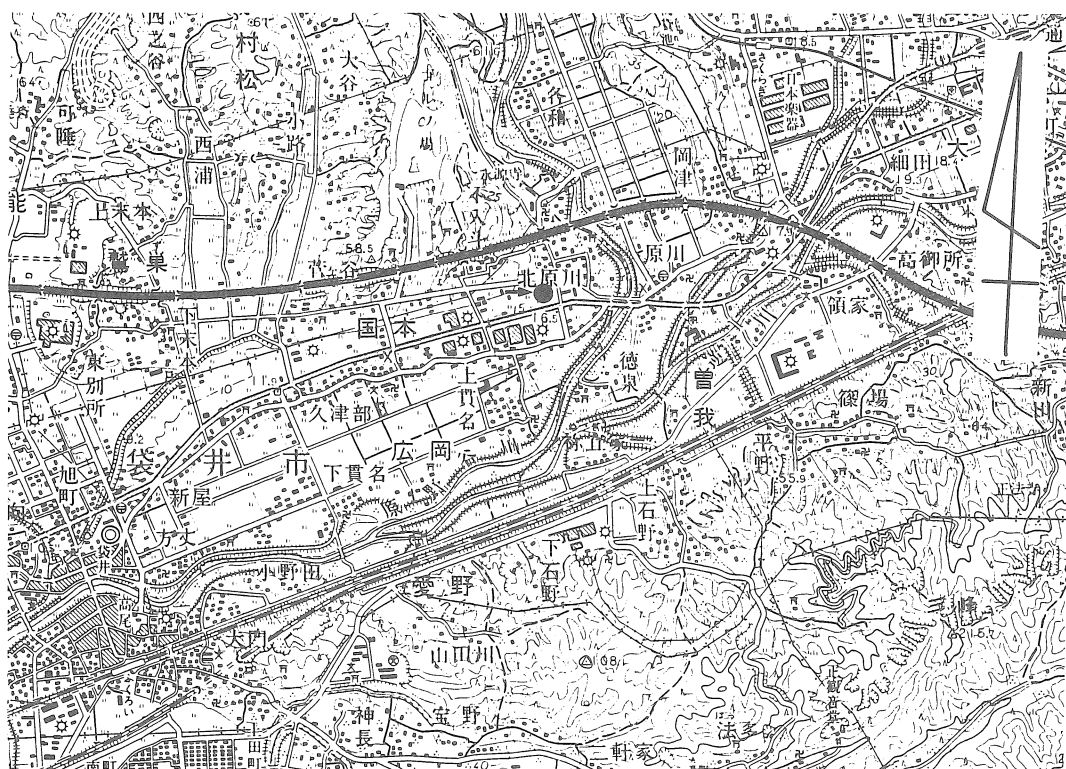
第1章 調査にいたる経過

袋井市国本地内のシノムラ化学工業株式会社静岡工場では、現工場の西南の水田を買収して新たに工場兼倉庫を建設する計画を立てていた。工場周辺は以前より「坂尻遺跡」の範囲に含まれていたため、常務取締役工場長・成田昭夫氏及び副工場長生産部長・水野陽市氏が計画段階より袋井市教育委員会に相談にみえられ発掘調査の計画を練った。袋井市教育委員会では、この時期、すでに多くの発掘調査を抱えていたが、シノムラ化学工業株式会社は以前より埋蔵文化財に対して深いご理解をいただき、いくつかの発掘調査も実施している経緯もあるところから平成4年10月より袋井市文化財担当調査員・早川保子を担当者として現地調査にかかることとした。なお、調査交渉、発掘届、委託契約等についての事務は文化財係長・吉岡伸夫のもと主任学芸員・永井義博が補佐した。なお、シノムラ化学工業株式会社静岡工場用地関連の発掘調査は今回までで都合5件行われており、坂尻遺跡の記録調査について先駆的な役割を果たしていただいている。

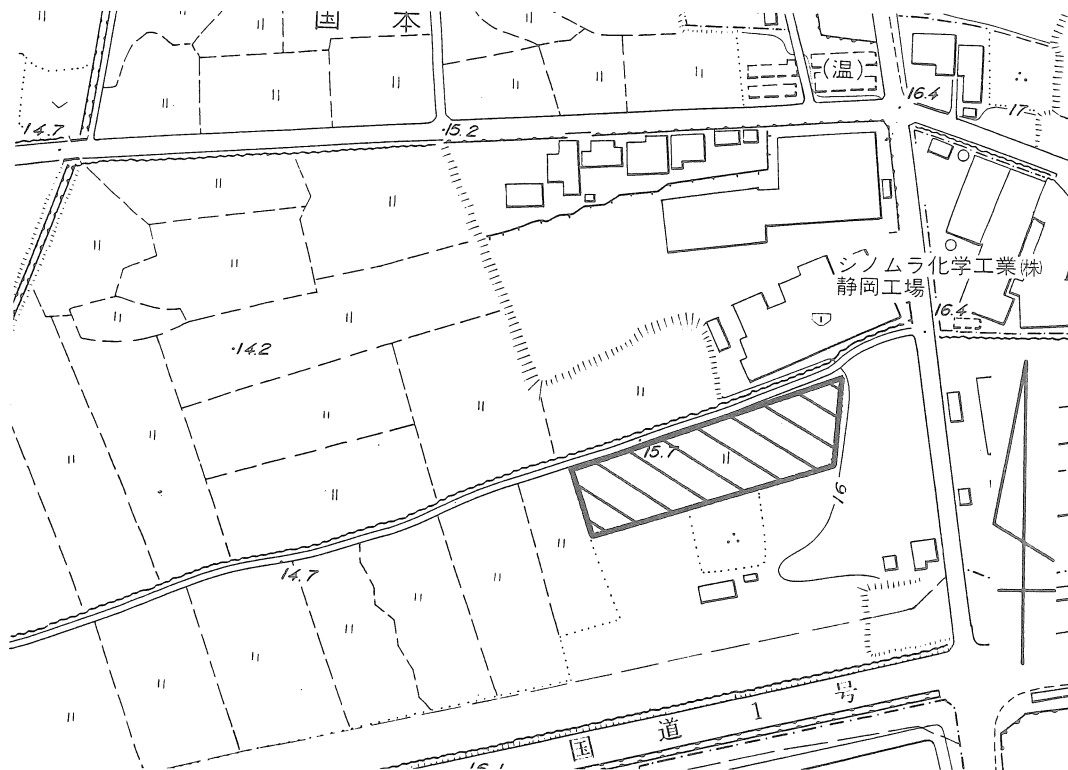
（教育委員会事務局）

第2章 調査経過

- 平成4年9月30日 発掘調査予定地に白線を引き調査区を決定する。
最初に重機により周囲に排水溝を入れて排水ポンプを設置する。
調査区北側の農道に沿って4ヶ所試掘トレンチをいれる。
- 10月2日～10月9日 重機により表土を除去する。耕作土下より土器片が若干出土している。
精査の後、ビニールシートを掛けて遺構面を保護する。
- 10月21日 調査区の西側より第Ⅱ層より約7～8cmの深さで掘り下げる。
- 10月13日～10月20日 長雨のため作業中止。
- 10月21日 雨が上がってポンプを使って排水作業の後、西側より第Ⅱ層の掘り下げを継続する。土師器を中心に遺物が出土している。遺構確認を行ってプランのつかめた遺構より発掘する。掘立柱建物跡の柱穴が確認できた。
- 10月28日 溝跡SD1を発掘開始。
- 11月2日 溝跡SD1の覆土内より「土製小玉」が出土する。祭祀に使用したものか。さらに注意しながら掘り下げていく。
- 11月5日 SE1の調査も開始する。
- 11月6日 西区の完掘。（株）フジヤマにより航空写真測量を行う。
- 11月10日 工場との打合わせにより調整池部分も発掘調査の必要が出てくる。
- 11月11日 東区第Ⅱ層を掘り下げて溝跡SD5を確認する。
- 11月13日～11月20日 追加された調整池部分を工事の都合により先行して発掘した。
- 11月26日 続いて東区も第Ⅱ層を掘り下げ溝跡SD6等を検出する。
- 12月16日～12月18日 調査終了に伴い発掘器材の撤収をおこなう。



第1図 坂尻遺跡の位置



第2図 平成4年の調査地

第3章 調査体制

調査計画 シノムラ化学工業株式会社静岡工場

調査指導機関 静岡県教育委員会文化課

調査受託 袋 井 市

調査実施機関 袋井市教育委員会

教 育 長 浅 井 通 男

教 育 次 長 岩 崎 保

社会教育課長 兼 子 春 治

文化財係長 吉 岡 伸 夫

主任学芸員 永 井 義 博 加 藤 理 文

松 井 一 明

学 芸 員 白 澤 崇 森 井 雅 彦

調 査 員 早 川 保 子 (本調査担当者)

経 理 事 務 村 田 博 美

(現地調査参加者) 大庭嘉平 鈴木 武 大場 力 加藤博司

鈴木健蔵 鈴木定雄 高橋秋義 高橋邦夫 高橋四郎 三浦久雄

山崎荘一 山本 修 山本喜久 杉山兼一 本多八重子 三浦とく江

鈴木きみ子 鈴木敏子 寺田しま 山崎好江 戸倉みつ子 大庭泰子

(資料整理参加者) 山下悦子 船越スミ子

第4章 調査方法

今回の発掘調査は、水田地帯の発掘ということで排水作業の善し悪しで調査の質が出てしまうために事前に調査区周辺のコンタや農業用水・排水の位置を確認してから遺跡内の排水計画をたてた。具体的な調査方法は、対象となる敷地内のうち、建物の建設される予定地内のみを発掘調査するため、その輪郭にそって重機で深さ約1 mの排水用の溝を切りコンタにあわせて集水ますを設けて周囲からの水を遮った後、一般の遺跡と同じく平面調査を行った。水田耕作土は重機で除去し、次いで作業員さんの手により遺構確認をしながら発掘を行った。

工場建設の時期と発掘調査終了の時期の関係もあって、遺構の実測はすべて小型ラジコンヘリコプターによる航空写真測量を使用し、調査区を3つに分割して発掘→測量→写真→工事と工程の円滑化を計った。また、同方法で垂直・鳥瞰の写真撮影も行ない効率化を計った。

調査における遺構・遺物の写真撮影については、中型カメラ（アサヒペンタックス6×7）1台と小型カメラ（Nikon F401）2台を使用した。現場で使用したモノクロフィルムはフジ写真フィルム株式会社のネオパンSSを、カラーフィルムも同じくフジ写真フィルム株式会社のフジカラー100 スーパーGフィルム使用した。

（教育委員会事務局）

第5章 地理的・歴史環境

坂尻遺跡は、袋井市街から国道1号線を約5km東進した掛川市と境を接する袋井市国本地区内に位置している。ここは、袋井市村松にある名利、医王山油山寺一体に広がる可睡・油山丘陵（最高115.2m）の南東端にあたる。この丘陵は、小笠累層（泥層と礫層の厚い互層）とその下に不整合で横たわる曽我層群（下部礫層、中部凝灰質層・泥層・上部砂層）により形成されている。遺跡のすぐ東側には掛川市八高山を源とする原野谷川が吉岡の丘陵に沿って南下し大きく西に流れを変えるところである。この変換点あたりは、掛川市から流れてくる逆川、垂木川等の合流点でもある。河川の周辺は肥沃な沖積平野で、砂層、泥層、礫層が交互に厚く堆積しており、上流の山地で掛川層群と呼ばれる上部新第三系泥砂礫層からなる低地性丘陵を解析した結果である。現在の坂尻遺跡の周辺を流れる原野谷川は、河川改修によって南北向きに直進するが、原川・徳泉・上貫名にはもとの蛇行流路の跡が残っている。蛇行流路の発達には、周辺の川が普段はおだやかな流れであるが、大雨が降ると河川が氾濫を起こし、次々と流路を変えたことを示している。

さて、袋井市国本地区での人類の活動の痕跡としては、縄文時代～弥生時代の遺構・遺物が丘陵の遺跡を中心に確認されている。しかし、最近の大規模開発の結果、周辺の低地においても、弥生時代中期の遺構・遺物や、古墳時代前期のいわゆる古式土師器を出土する遺跡の調査が多くなっている。古墳時代になると、5世紀代に原野谷川上流の和田岡台地に前方後円墳や大型の円墳を中心とする和田岡古墳群が形成されるようになる。その中でも代表的な古墳として吉岡大塚古墳（前方後円墳）、瓢塚古墳（前方後円墳）、各和金塚古墳（前方後円墳）がある。いずれも、墳丘に葺石が配置されて埴輪が置かれた中期の古墳である。6世紀にはいると、古墳群は、台地の奥部から丘陵先端に進出してくる。浅間山古墳（前方後円墳）、権現山古墳（前方後円墳）、宇佐八幡境内1号墳（前方後円墳）などが各丘陵の盟主墳となり、それらを取りまくように石ノ形古墳、宇佐八幡2号墳等の円墳が散在している。このうち、石ノ形古墳は坂尻遺跡から約100mの至近距離に位置する直径27mの円墳で、宇佐八幡1号墳、宇佐八幡2号墳も坂尻遺跡より約200mの原野谷川右岸にある。6世紀後半～7世紀にかけて丘陵斜面には横穴墓群が集中的に造られるようになる。原野谷川中流域では、菅ヶ谷横穴、岡津横穴などが坂尻遺跡と関連を持つ遺跡であろう。しかし、この時期は、丘陵上の高塚墳も横穴墓と並行して多数築造されているのを見逃してはならない。平地に立地する集落遺跡としては、調査地南側の国1バイパスの発掘調査で発見された坂尻遺跡がある。坂尻遺跡は、奈良～平安時代の郡衙後として著名であるが、その官衙遺構の下層より古墳時代の遺跡・遺物が検出されている。その状況から、原野谷川の自然堤防により形成された微高地を集落と考え、それに続く後背湿地を原野谷川の水を引いて水田として営まれた一つの村の姿があらわれてくるのである。しかし、それ以上にこの村は地理的に東国への交通の要でもあり、また原野谷川の水上交通の中継地でもあっただろう。



第3図 調査区全体図

第6章 遺構の概要

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡、井戸状遺構、溝状遺構、竪穴住居跡、ピット群である。ただし、調査区が狭いこと、遺構確認面が浅いことなどのため、十分に全体がつかめなかった。

掘立柱建物（SB）

SB1（第4図）

間口2間（3.85m）×奥行2間（3.85m）棟方方位N-26°-Eをなす。SD1の東側に位置し、SB2と重複している。柱間はほぼ同一間隔であり、掘り方内からは2ヶ所に柱根も確認されている。

SB2（第4図）

間口2間（4.45m）×奥行2間（3.2m）棟方方位N-21.5°-Wをなす。間口より奥行きが少し短くなる長方形をしている。SB1がSD1に並行しているのに対してSB2は東西方向に間口を置く建て方であり、掘り方は同じく9本の柱からなるが、規模はいずれも小さくなっている。

SB3（第5図）

工場増築工事の為に発掘区西側にあたり、調整池の工事に伴う調査区内に検出された遺構である。北側が発掘区外であり、全部の形をつかむことができなかったが、片側2間（5.9m）を計り、掘り方は径0.6m～0.8m深さ0.5m～0.6mあり、柱根や礎石などは確認されなかったものの、しっかりした掘り方であった。

井戸状遺構（SE）

SE1（第5図）

径1.07m深さ1.2m平面円形をなす。掘り込みは垂直であり、井戸枠は確認されなかった。北縁は今回の発掘調査の排水溝にあたり、ユンボによる掘削のため断面を確認する事ができなかった。覆土下層からは、杓の柄状の木製品と共に7世紀中頃と思われる坏と平瓶の口縁部が出土している。

溝状遺構（SD）

SD1（第6図）

西区の西端から北方向に斜めに確認された溝である。検出確認長は13.75m幅1.8m～2.3m深さ0.7m～0.8m断面は上部が少し開き気味のU字状をなす。溝の南側には3ヶ所のまとまりをみせて、祭祀を行なった後に廃棄されたと思われる遺物が確認されている。

SD5（第7図）

東区を南北方向に横切る小溝である。検出確認長は14m幅0.6m～1.0m深さ0.12m～0.32m断面は浅井U字状であり溝は北から南の方向に深く、幅広くなっている。確認された時の状況は上層部が、現在まで繰り返し行なわれた水稻耕作のため、削平されていた。遺物は握りこぶし大の礫と僅かな木片と共に、大量の土器が溝の中全体に出土している。しかし、

土器はいずれも細片であり磨耗した状態であった。

竪穴住居

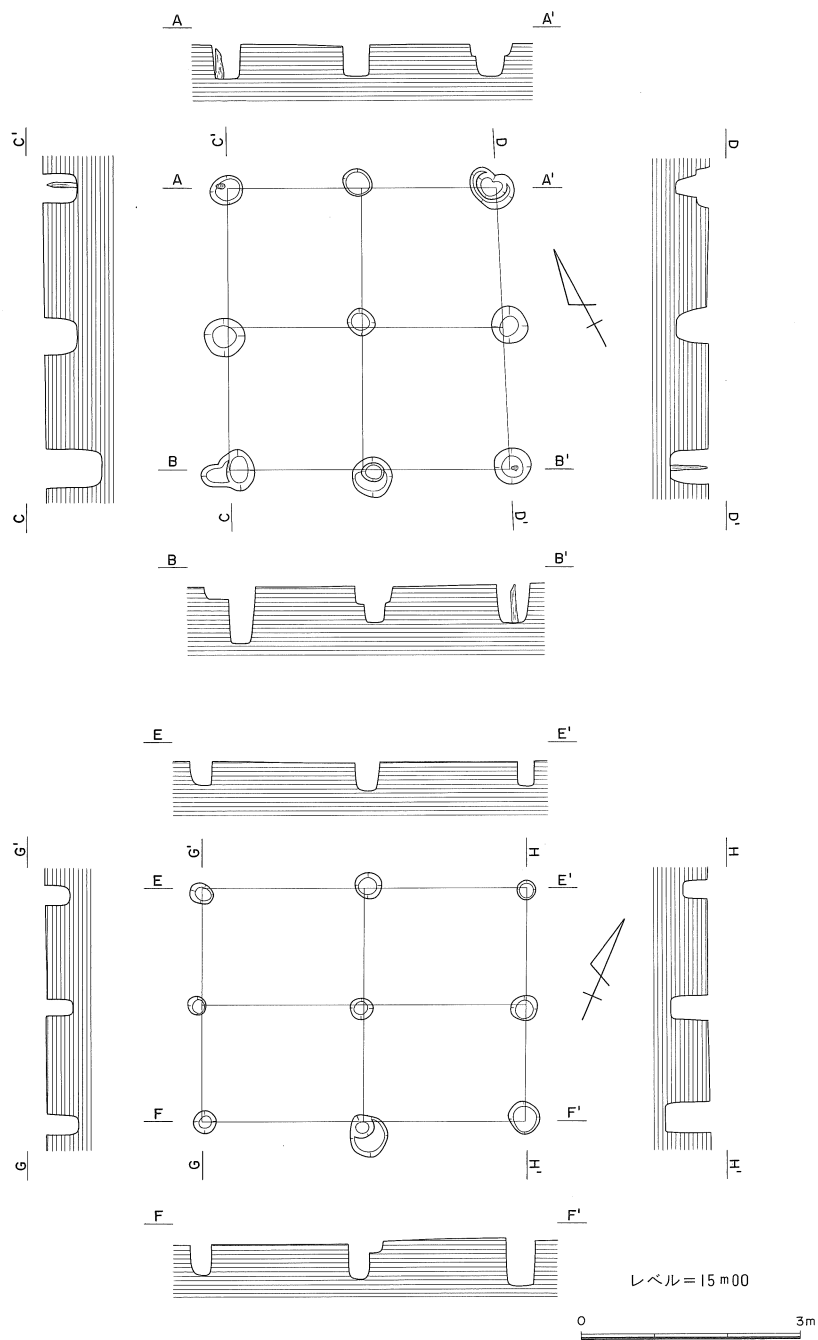
1号住居（第8図）

東西幅（8.7m）南端は発掘区外になり検出されていない。棟方方位は $N-4.5^{\circ}-E$ をなし、平面は隅丸方形である。北側壁溝の一部に途切れる所があり、竈の位置ではないかとの期待はあったが確認はできなかった。

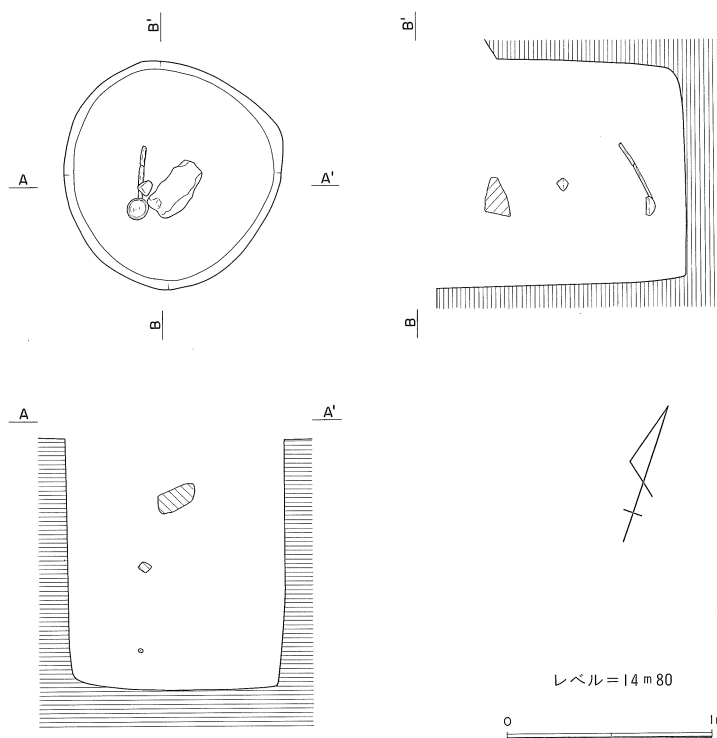
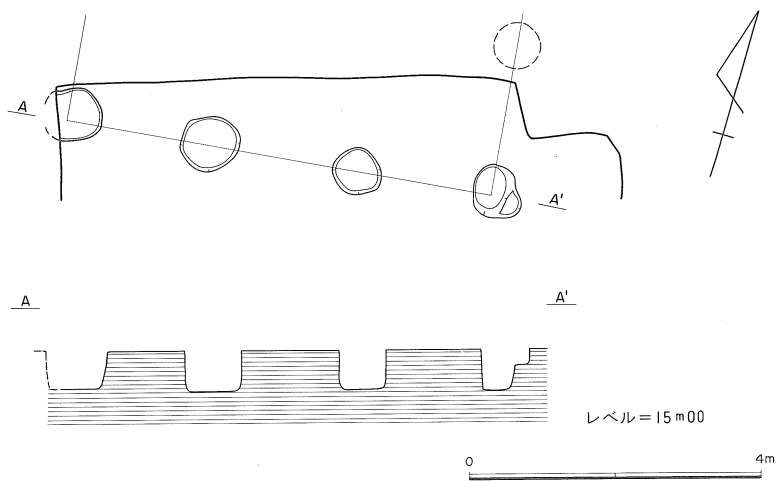
土壇状遺構

014（第9図）

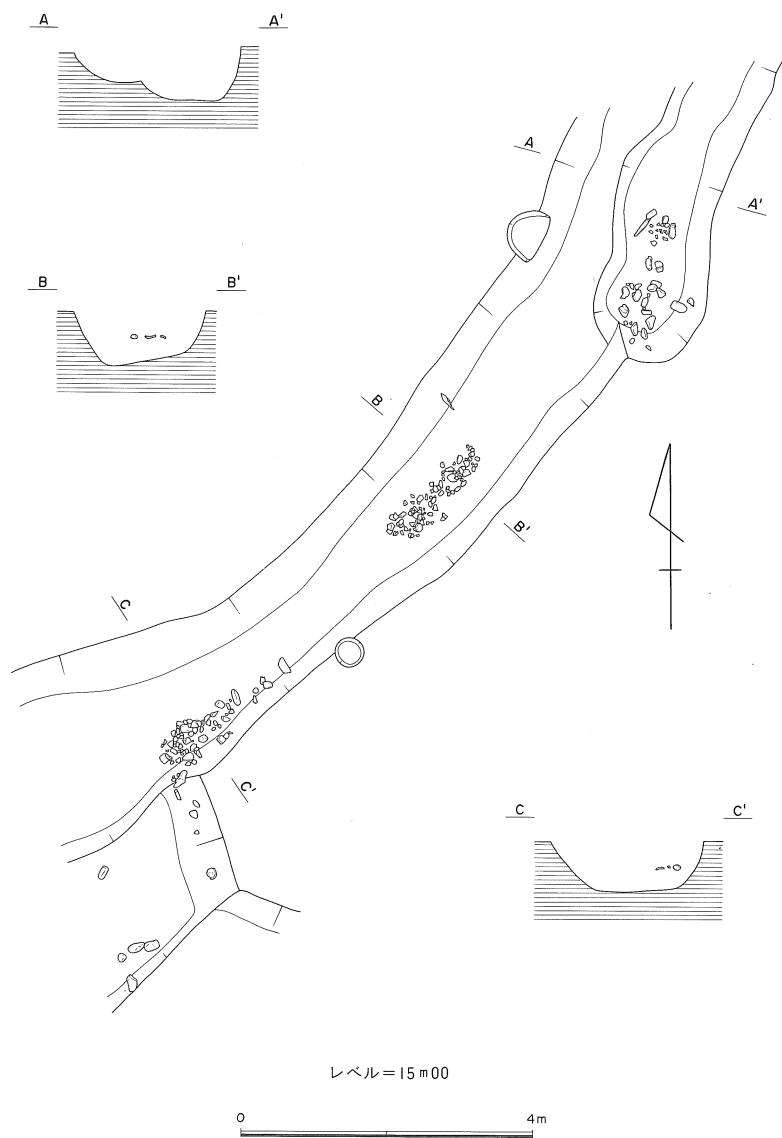
長径0.93m×短径0.86m、検出面からの深さ0.18mで平面楕円形をしている。SD12と重複し、遺物は完形に近い土器がまとまって出土している。



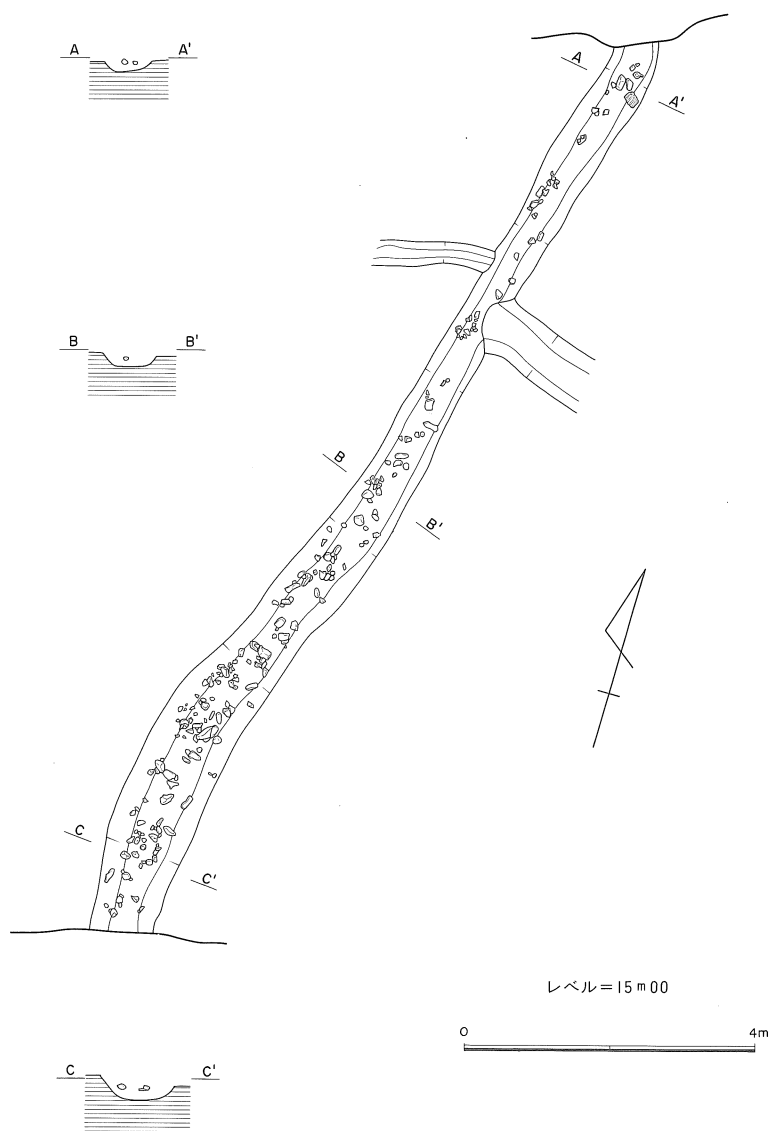
第4図 SB1、SB2実測図



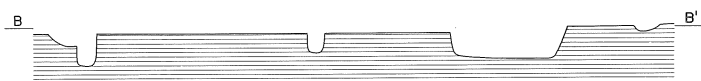
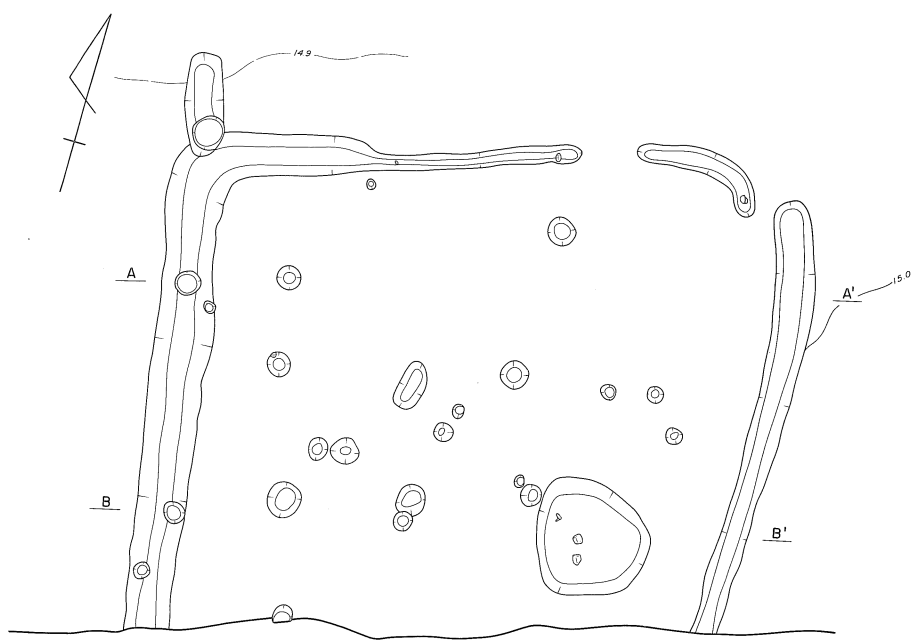
第5図 SB3、SE1実測図



第6図 SD1 実測図



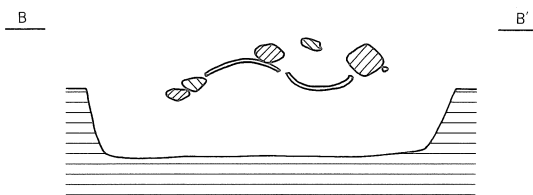
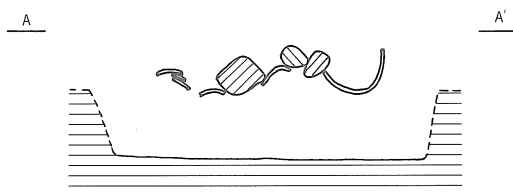
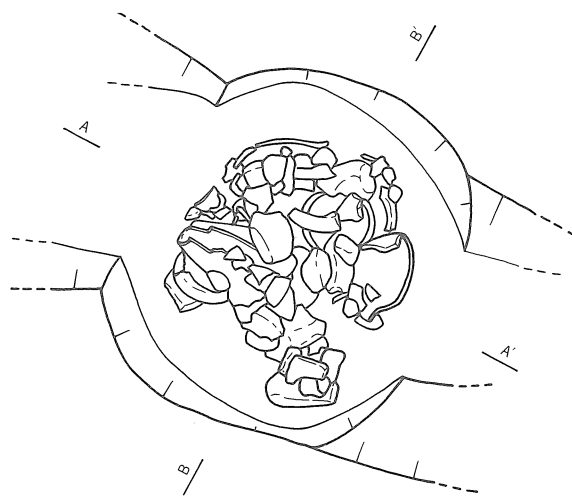
第7図 SD 5 実測図



レベル = 15 m 00

0 4m

第 8 図 1 号住居跡実測図



A.S.L. = 15.00m



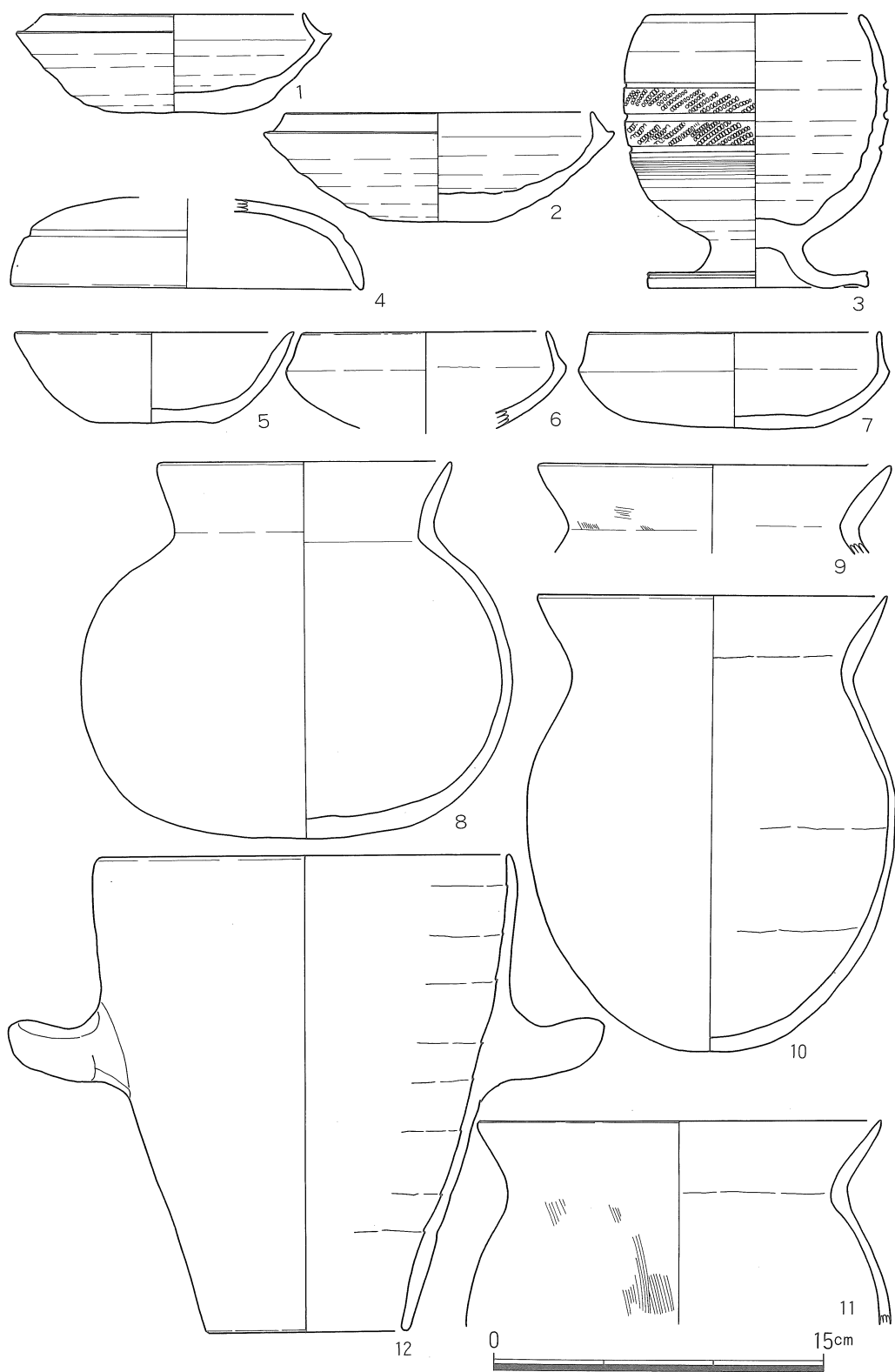
第9図 土壇014実測図

第7章 遺物の概要

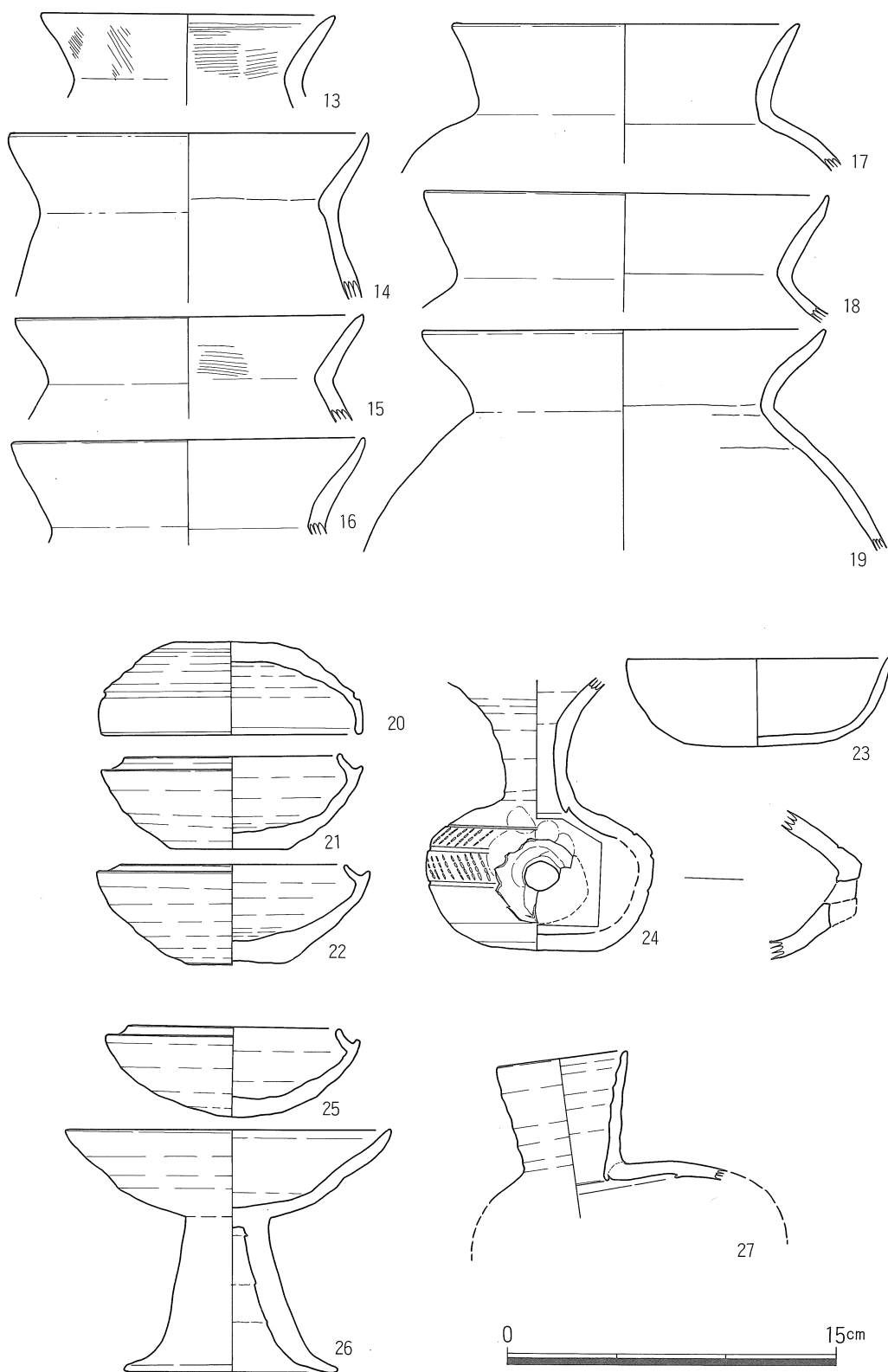
平成5年度の坂尻遺跡発掘調査では、古墳時代の土器を中心に大量の遺物が出土している。ここでは、紙面の都合から土壌014を中心とした代表的な出土遺物について報告したい。このうち須恵器は3、19、20、21、23、24、26の7点で、生焼けの須恵器は1、2の2点である。それ以外はすべて土師器である。ただし、本遺跡出土の土師器はたいへんにもろく、剥落して表面の調整がほとんど観察できないのが残念である。

図版の遺物番号の0～19が土壌014より出土した一括遺物で今回の調査でも重要な資料である。また、遺物番号20～22は遺物包含層である第Ⅱ層から出土し、遺物番号の23～24は溝状遺構のSD5より出土、25～26は同じく溝状遺構のSD1より、そして、最後に27は井戸状遺構のSE1よりの出土である。

1の坏身は口径11.8cm、器高4.50cmの生焼けの須恵器である。表面は赤い部分と灰白色の部分の焼けむらが残りもろく土器表面は剥落して調整はわからない。2の坏身も同じく生焼けの須恵器で口径16.1cm、器高5cmの完形品である。色調は1と同じく表面は赤い部分と灰白色の部分の焼けむらが残りもろく土器表面は剥落して調整はわからない。3はジョッキ形の土器で須恵器である。口径9.60cm、器高12.4cm、底径10cmである。全体を回転ヨコナデで調整した後にクシ状工具により胴部中央に横方向に2列に刺突文を施している。4は土師器坏蓋であるが模倣須恵器坏である。本図は回転復元であり口径15.1cm、器高4cmであるが残存率は6分の1程度である。剥落が激しく表面の調整はまったく確認できない。5は口径12.5cm、器高4cm、底径6cmの土師器の坏身である。小片のため回転復元図であるが須恵器を模倣しているのかよくわかる。剥落が激しく表面の調整痕は観察できない。7も6と同じく須恵器を模倣坏身である。口径13.4cm、器高4.40cmの土師器の坏身である。これも剥落が激しく表面の調整痕は観察できない。8は土師器の短頸壺で口径13.5cm、器高17.3cm、胴部最大径は19.6cmである。2～3mmの砂粒を多く混入する胎土でたいへんもろく表面は剥落している。9も土師器壺の口縁部のみの破片で回転復元で図化している。推定の口径は16cmで土器表面は剥落している。10は土師器の長胴甕であるが残存状況がわるく調整は確認できない。口径15.8cm、器高20.8cm、胴部最大径は16.8cmである。11も同じく長胴の甕とみられるが壺上部しか残っていない。口径は18.3cmである。12は土師器の把手付の甕である。口径18.6cm、器高21.7cm、底径9.30cmでほぼ完形である。これも剥落が激しく表面の調整痕は観察できない。13～19はすべて土師器の甕の口縁部である。どれも小片で残りが悪く復元実測である。20は須恵器坏蓋で口径11.8cm、器高4.24cmで長石をわずかに混入して焼成は良好である。21は須恵器坏身で口径10.2cm、器高4.60cmで焼成は良好である。22も須恵器坏身で口径10cm、器高4.20cmで焼成は良好でナデ調整がされている。23は土師器坏身で表面の剥落が激しく、口径12cm、器高4.10cmである。24の甕は図化すると何とか見れるが破損が激しい。25は須恵器坏身で口径9.60cm、器高4.10cmで焼成は良好である。26は土師器高坏で口径14.9cm、器高11.1cm、底径9.80cmである。27横瓶の口縁部である。



第10图 出土遺物実測図(1)



第11図 出土遺物実測図(2)

第8章 まとめにかえて

今回の発掘調査区の遺構・遺物の出土状況から、古名栗川の自然堤防上にできた古墳時代の集落が周辺に拡大していき、北側丘陵上にも人々が生活を営んだ後期の集落分布域を考える上で大きな成果を挙げる事が出来たと思う。

検出された遺構では、西区溝状遺構（SD1）からは大量に廃棄された土器が出土している。この中にはミニチュア土器、土製玉などが含まれており、これが祭祀遺物であると考え、周囲にある三棟の掘立柱建物に定住していた人々にとって、この辺りは祭祀が行なわれた集落の中の重要な場所であった可能性もある。

東区溝状遺構（SD5）は調査区を南北に横断し、遺構の上層は現在までの水稲耕作のため削平されており、溝下層部に残る遺物のみが検出されたが、遺物出土状況が一度に廃棄されたようなまとまりを見せたSD1に比べ、握りこぶし大の礫と土器片が溝全体に散乱した状態であった。

東区土壇状遺構（014）は土師器坏身、甕、甗、が礫と共に検出されており、器種組成された一括資料として、古墳時代後期の坂尻遺跡を考える上での貴重な資料といえよう。

井戸状遺跡（SE1）は7世紀中頃と考えられる坏、平がひしゃくの柄状の木製品と、約30cmの礫が共に出土している。北側半分が発掘調査のための排水路確保でユンボにより削平されたので残念ながら断面の確認ができなかった。

一般国道1号線袋井バイパスの建設工事に伴う発掘調査において、注目された奈良・平安時代の官衙遺跡（佐野郡衙）としての遺構・遺物の出土状況は、198年大庭塗装工場建設に伴う発掘調査、1986年シノムラ化学工場増築に伴う発掘調査、1988年の小松フォークリフト整備工場建設に伴う発掘調査など、今回の調査区周辺で行なわれた発掘調査により報告されているが、この辺りは奈良・平安時代の坂尻遺跡の一番の中心部より僅かに北西に外れていた。

今回の発掘調査を実施するにあたり、御協力頂いたシノムラ化学工業㈱の常務取締役工場長の成田昭夫氏をはじめ副工場長生産部長の水野陽一氏そして工場の皆様方、力不足の調査を支えて下さった多勢の方々に、ここに記して心より感謝の意を表します。

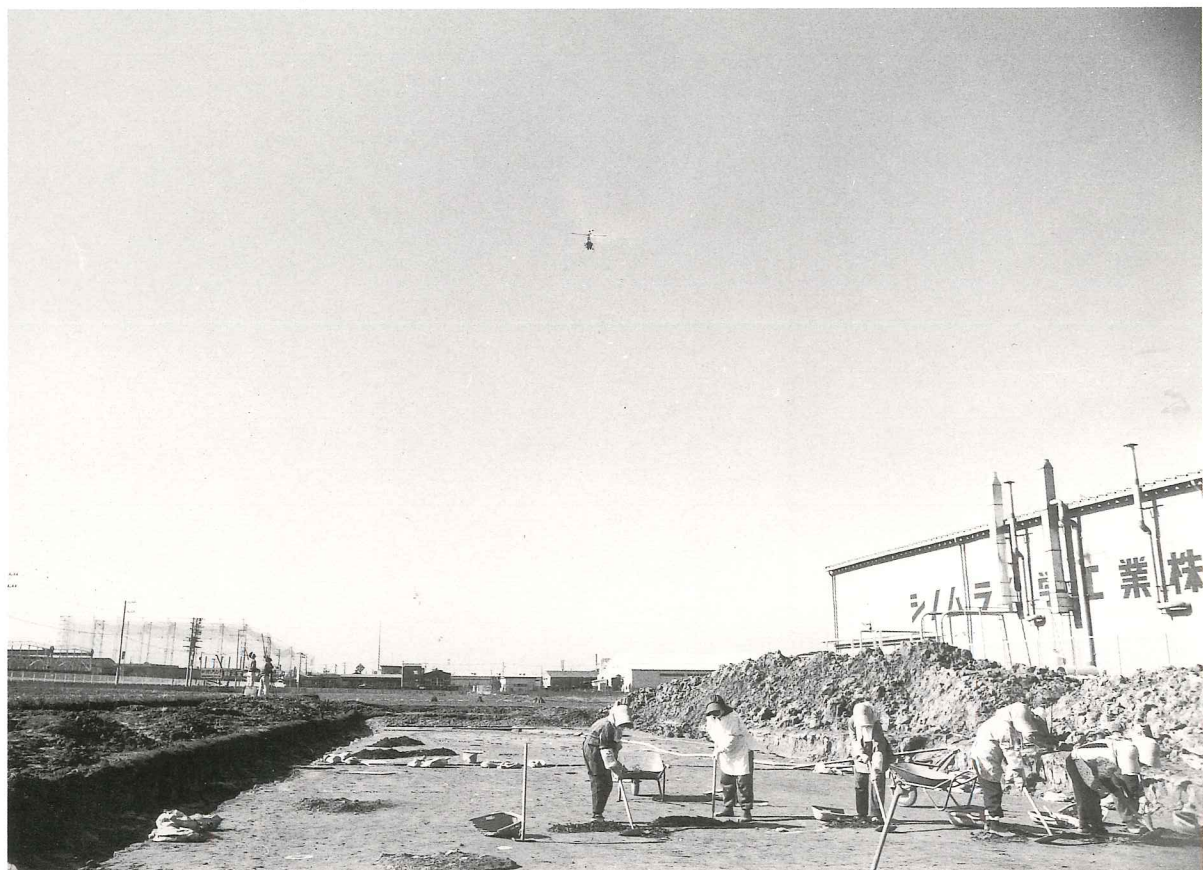
（調査員・早川保子）



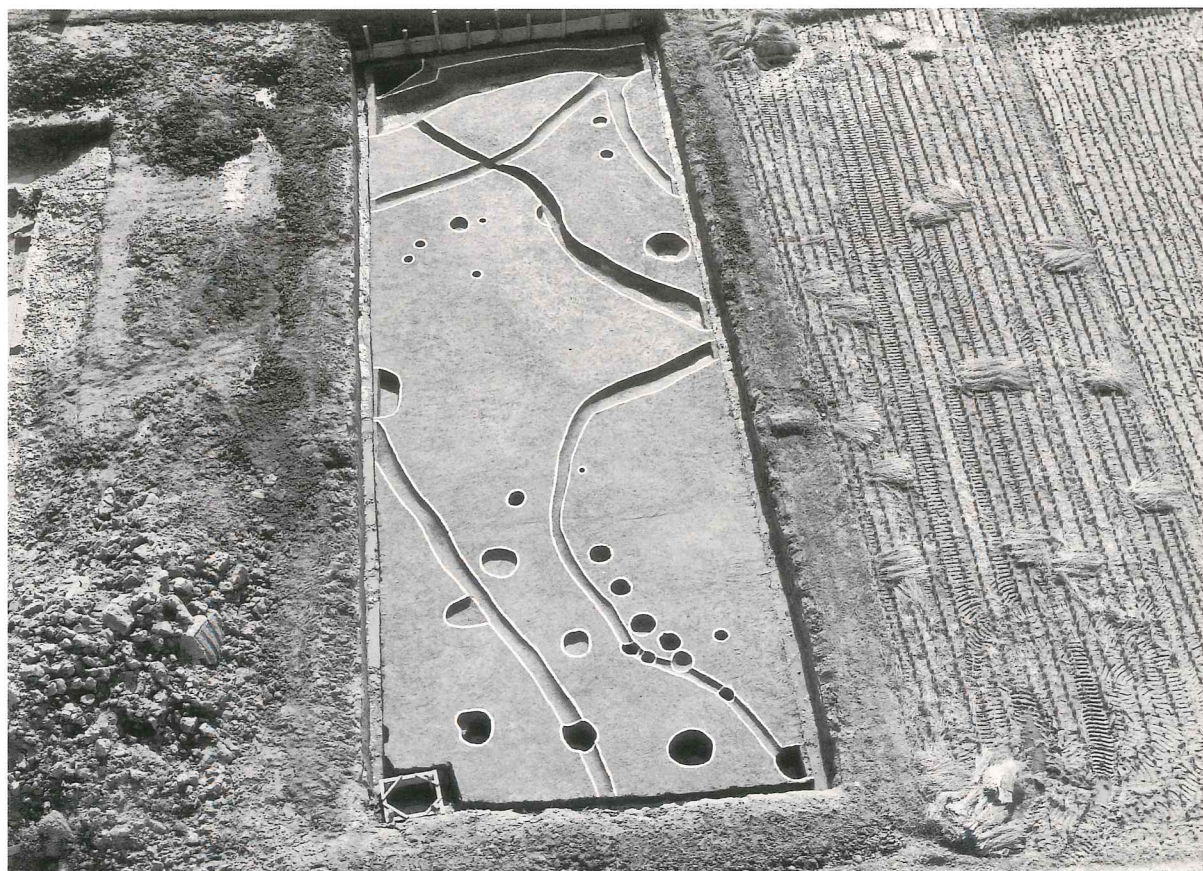
(1) 調査地全景（東より）



(2) 調整池部分発掘風景



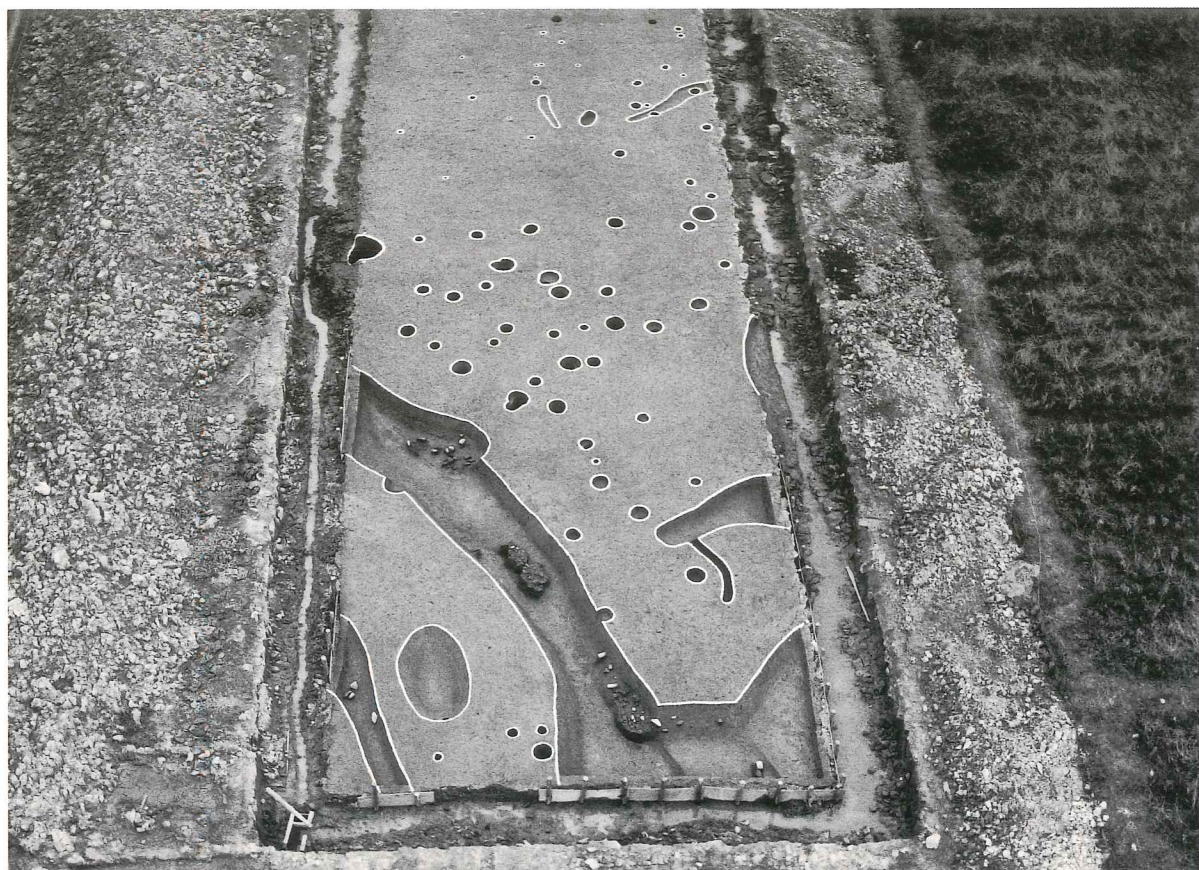
(3) ラジコンヘリコプターによる空撮風景



(4) 調整池予定地完掘写真（北より）



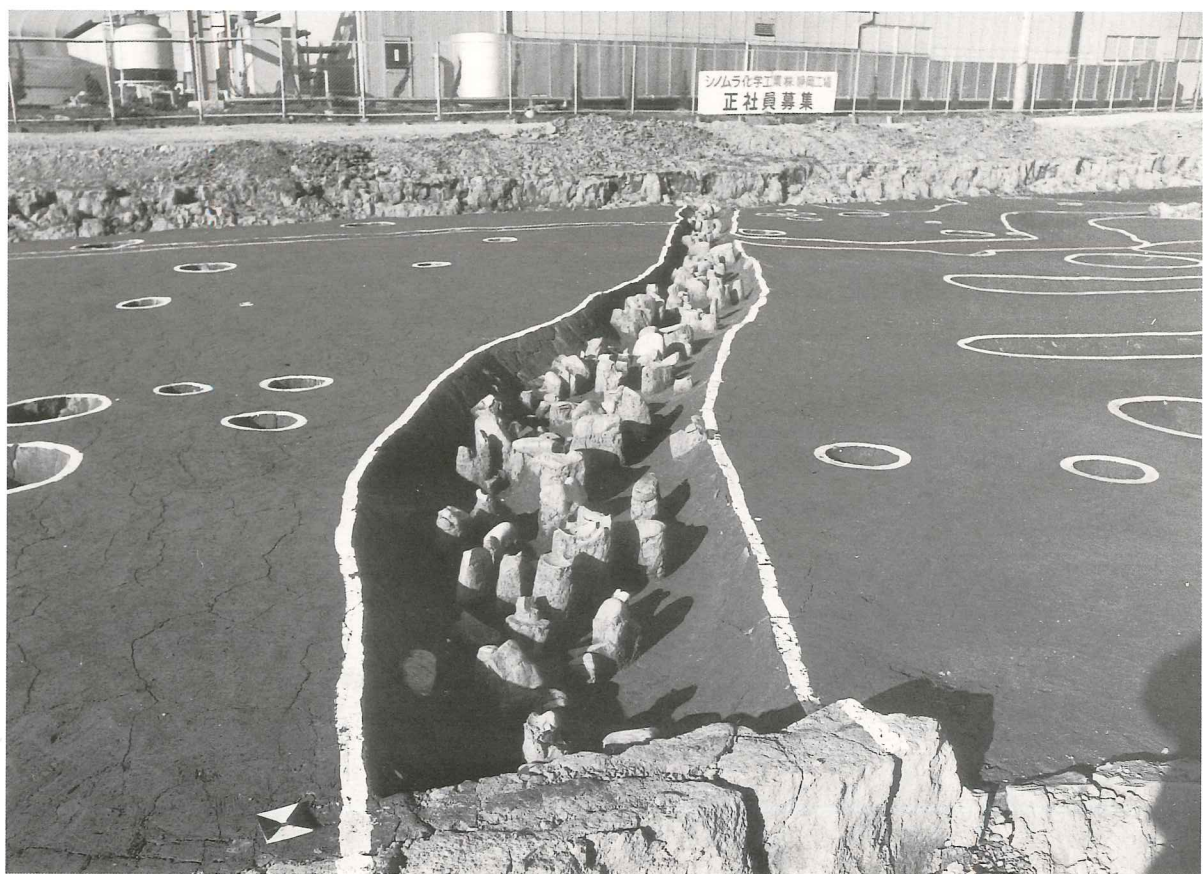
(5) 工場予定地東側完掘写真（南より）



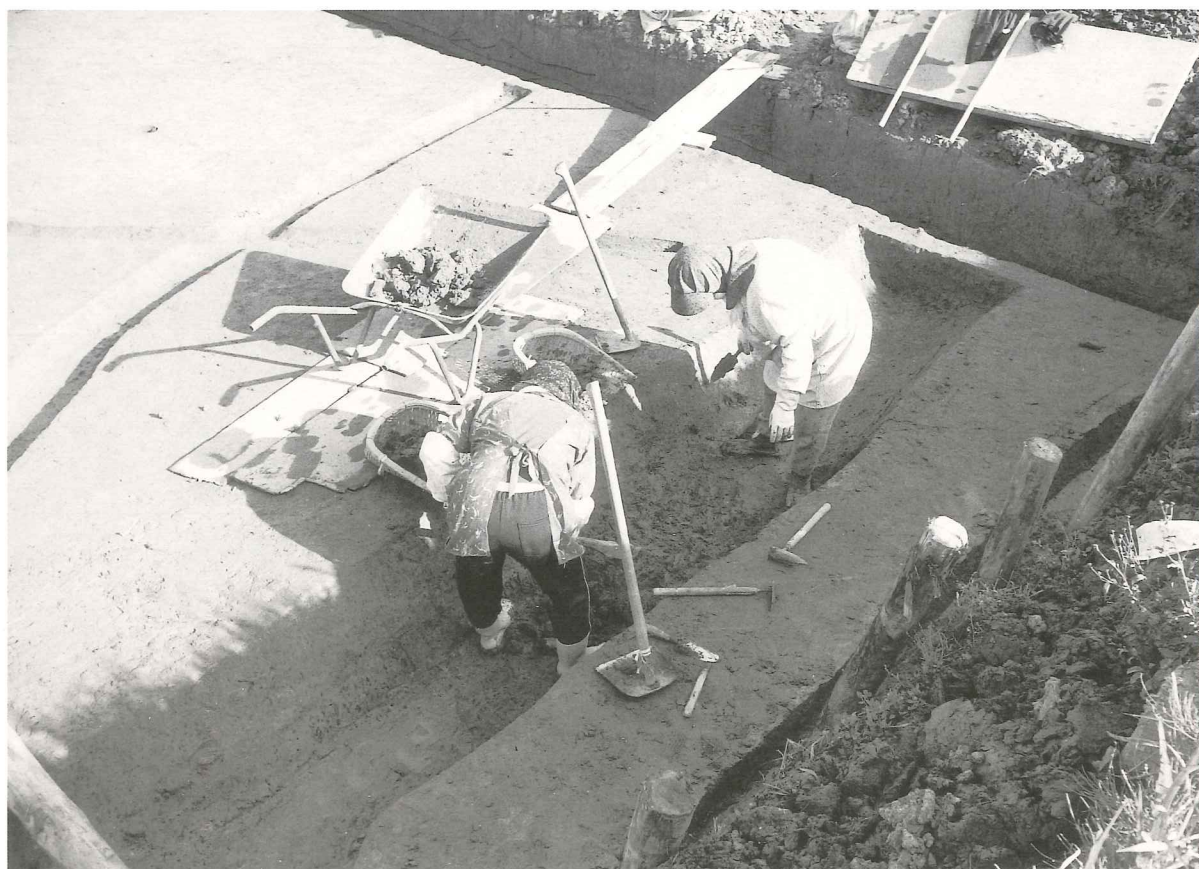
(6) 工場予定地西側完掘写真（西より）



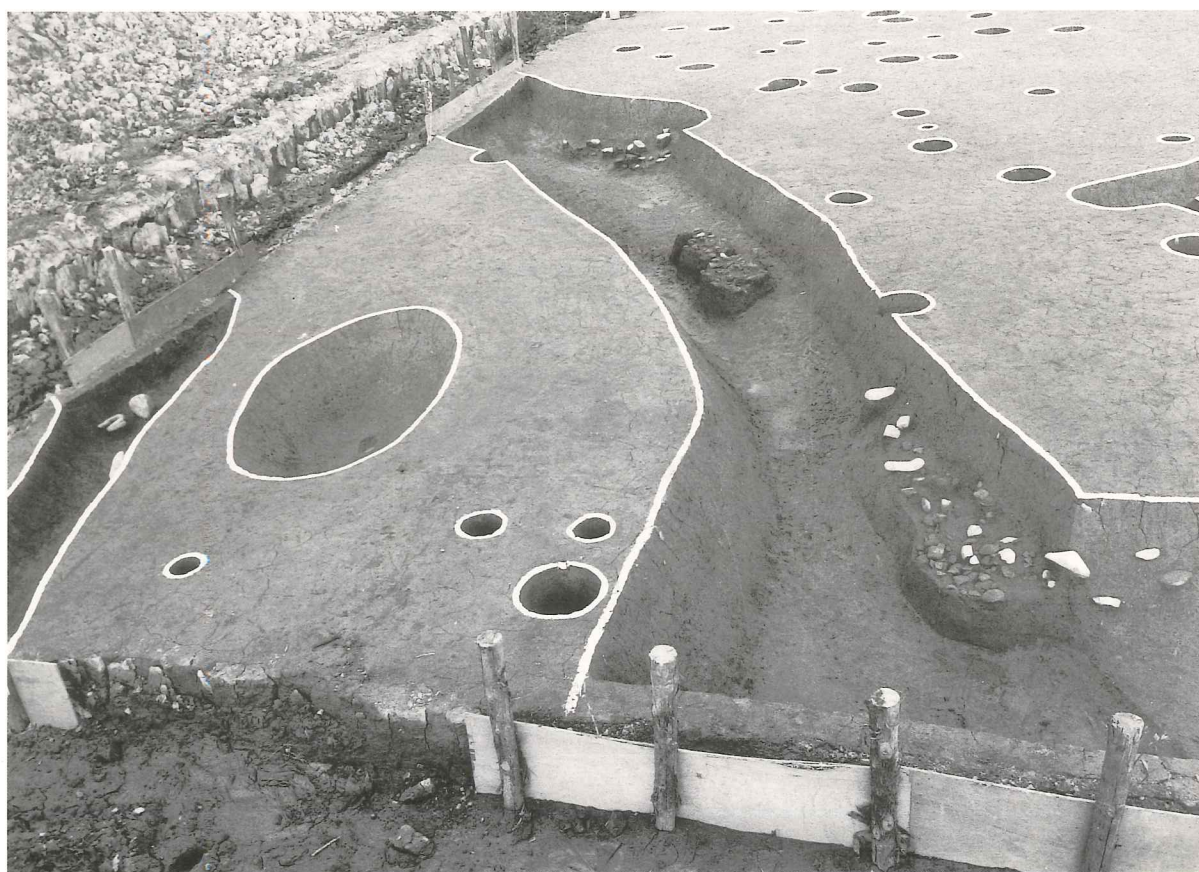
(7) 調査風景



(8) 溝跡 (SD5) の完掘状況 (南より)



(9) 完掘風景



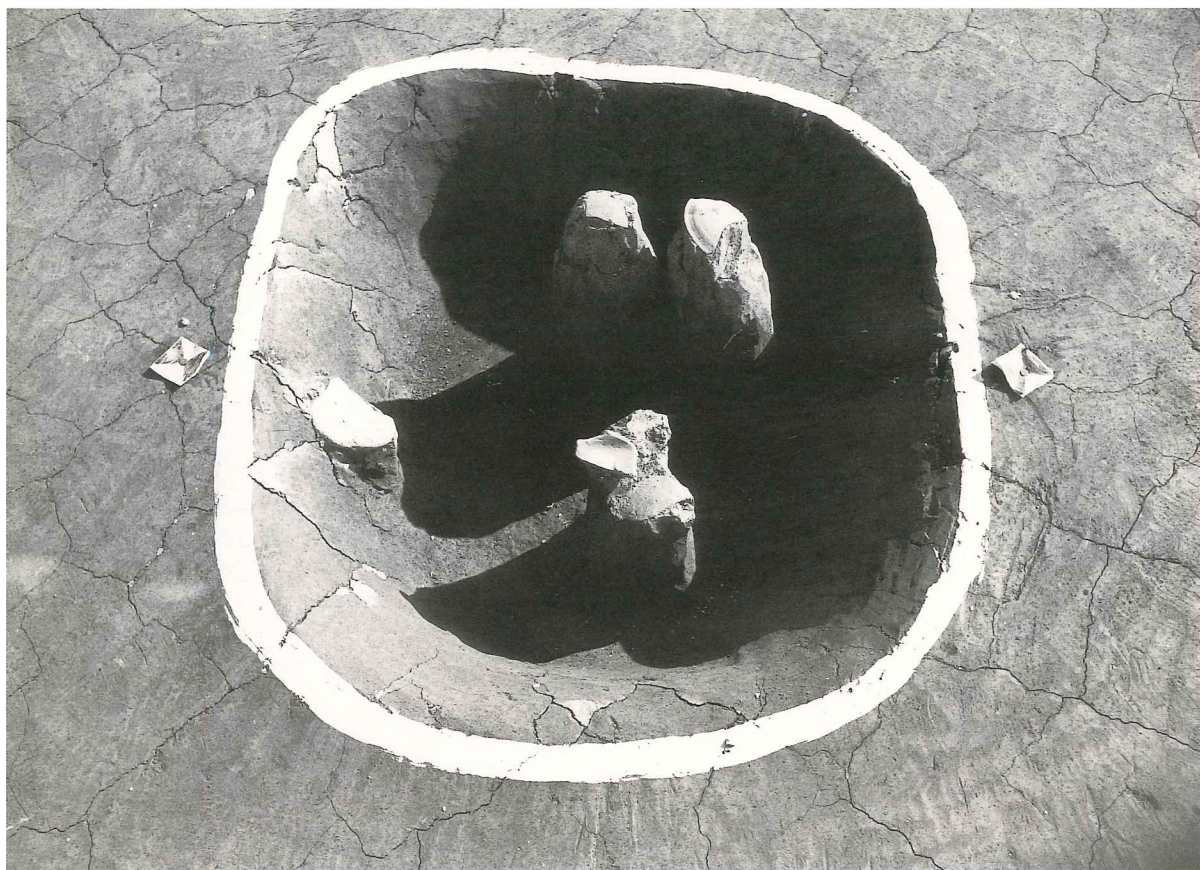
(10) 溝跡 (SD1) の完掘写真 (西より)



(11) 一括遺物を出土している 014



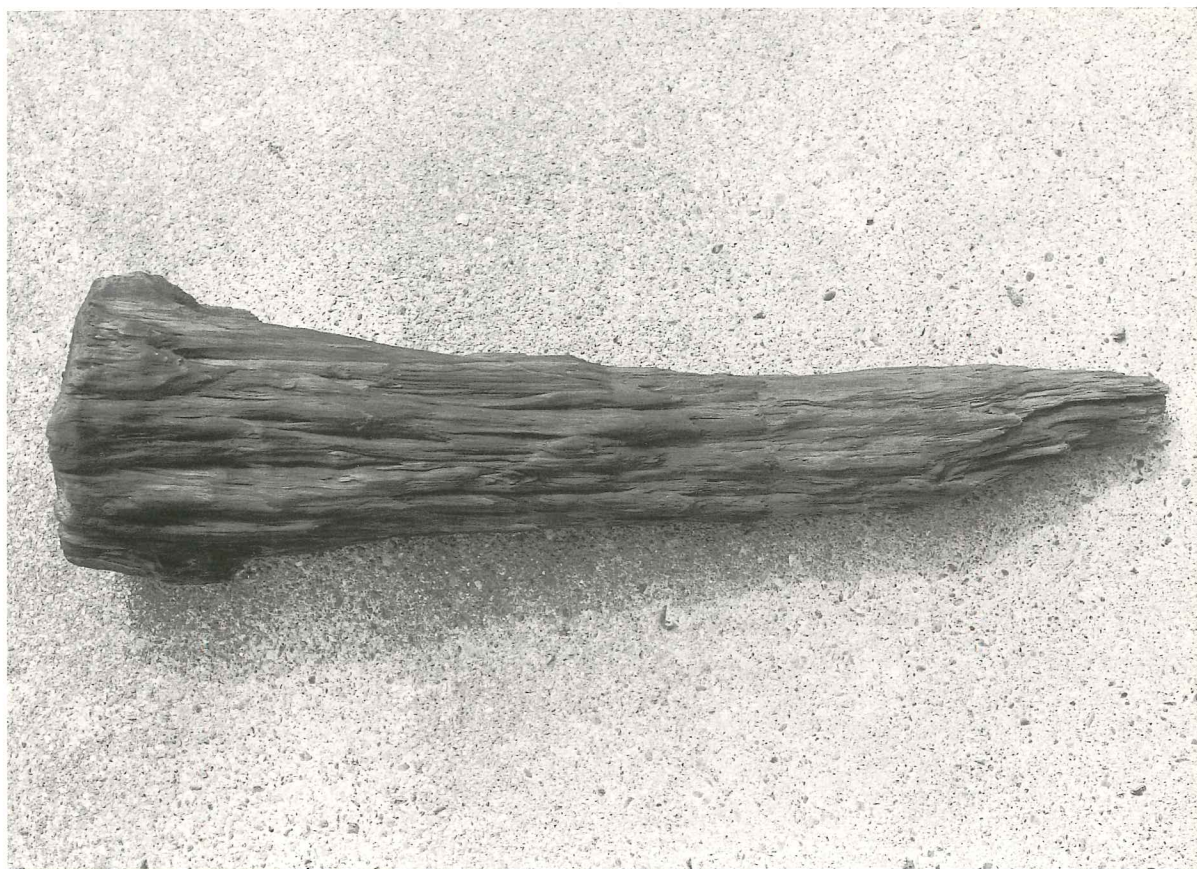
(12) 柱根の残るピット1



(13) 土器片の出土している 0 1 1



(14) 木製品を出土した溝跡 (SD 1)



(15) ピット 1 より出土した柱根



(16) ピット 1 より出土した柱根の拡大写真

坂 尻 遺 跡

ーシノムラ化学工業(株)静岡工場内ー

1994年 3 月25日

編集発行 静岡県袋井市新屋 1－1－1
静岡県袋井市教育委員会©
TEL 0538－43－2111

印 刷 浜 松 市 中 沢 町 1－1－1
株式会社 開 明 堂